

第1回日本チベット（蔵）医学研究会報告

—今何故伝統医学なのか—

川村 武¹⁾

キーワード：チベット医学、伝統医学、統合医療

要 旨

第一回日本チベット（蔵）医学研究会が平成19年5月26日に東京大学鉄門記念講堂にて開催された。代表は日本代替・相補・伝統医療連合会議事長である渥美和彦氏で、私を含めて13名の発起人により発足しましたが、その多くは平成14年8月に西寧（中国青海省）で行われた日中蔵医学学術交流会の参加者が中心となっている。研究会の趣旨は伝統医学と現代医学の融合による新しい健康づくりということで、艾措千氏（Ai Cuoqian、現青海チベット医科大学学長）の基調講演にはじまり、シンポジウムも盛会裏に終わった。

翌日には国際Healthy Agingシンポジウム—東洋の英知と西洋科学の調和—が企画され、開催された。シンポジウムにはアンドルー・ワイル氏を始めとして日本、韓国、中国、インド、チベットからそれぞれの伝統医学における第一人者が集まり、科学的な基盤にたった現代医学と経験に基づいた伝統医学が今後どのような形で融合され、さらに新しい健全な統合医療が作り上げられているかについて多くの情報交換がなされた。

A Report of the First Meeting of the Japanese and Tibetan Medicine Association

—Why the Traditional Medicine Takes a Second Look Now

Kawamura Takeshi¹⁾

Key words : Tibetan medicine, Traditional medicine, integrative medicine

Abstract :

The first meeting of Japanese and Tibetan medicine was held on May 26, 2007 at the Tetumon Memorial Hall of Tokyo University School. The president of this meeting, Atumi Kazuhiko and the organizers met together.

The main theme of this meeting was the harmonization of oriental wisdom and western science for the prolongation of healthy life expectancy. In the beginning, a lecture about Tibetan medicine was given by Ai Cuoqian, president of Qinghai University of Tibetan Medicine. A symposium on new integrative medicine was successfully held after that.

On the next day, the symposium to discuss the concept of harmonization and synergy of oriental wisdom and western science was organized. In the symposium, Professor Andrew Weil and doctors in traditional medicine from Korea, China, India, Tibet and Japan got together to share their knowledge.

Modern western medicine is based upon science and is considered as statistical medicine. On the other hand the traditional or complementary medicine is based on experiences and is also individual medicine. So these different health care systems will be used to create a new integrative medicine.

1) 宮城大学看護学部 (Miyagi University School of Nursing)

I. はじめに

私が初めてチベット医学に接したのは平成13年1月28日に早稲田大学国際会議場で開催された「チベット医学特別講演会」に参加した時でしたが、その時点では勿論まだチベット医学がどんなものであるのかについて知っていたわけではなく、ただチベットという言葉に興味をそそられたに過ぎませんでした。しかし講演した艾措千氏(Ai Cuoqian、現青海チベット医科大学学長)の話の話を聞いているうちにチベット医学の医療に対する考え方に共鳴し、講演終了後直ぐに一度チベット医学研究所を訪問させてくださいと御願ひしていました。幸いにもその場で快諾を得たので、その後間もなくして中国西海省西寧にある研究所を訪れることができました。そして講演を聞いた時にはまだ漠然と感じていたものが確かにはっきりとした形で確認する事ができました。それは端的に言えば現代医学が医療技術の発展と共に徐々に何処かへ消えてしまった医療の核心がいまだに生きているということである。

平成14年8月には「日中蔵医学学術交流会」が西寧で開催され、私も同席しましたが、現代医学とチベット医学が今後どのようなかたちで統合されていくべきかについて積極的な論議がなされ有意義な交流会になったと思われる。その時の思いを看護の視点から「信頼が患者を癒す」と題して河北新報 論壇(平成14年10月23日)に掲載させていただきましたが、交流会の概要は「秘境に医療の源流を訪ねて ー第1回日中蔵医学学術交流開記録集」と題してして刊行されました。その時に参加した人達を中心となって今回発足したのが日本チベット(蔵)医学研究会である。

II. 第1回日本チベット(蔵)医学研究会

平成19年5月26日に東京大学鉄門記念講堂にて第1回日本チベット(蔵)医学研究会が開催されました。代表は渥美和彦(日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)、日本統合医療学会(JIM)理事長)で、発起人が、浅井俊子、渥美英子、阿部博幸、上田至宏、上馬場和夫、植村

秀、岡田昌義、奥田托道、川村 武、今野由梨、杉本 聖、中井吉英、山本竜降の各氏です。少し面白いと感じたのは、会員はそれぞれ医療関係者や伝統医学を実践している人達であるが、研究会の中心となって活動している人達はいずれも心臓外科の第一人者で最先端の研究者であるということです。心臓はまた心の問題でもあるということなのでしょう。

研究会は「チベット医学の真髓」と題して艾措千氏の講演で始まりましたが、久しぶりの再会で嬉しかったと同時に、チベット医学研究のその後の急速な発展に驚かされました。チベット医学の発生そのものは古く、今のチベット医学の原型ができあがったのが西暦600年頃といわれているが、その頃に中国医学、アーユルベーダ(インド)、ユナニ医学(中東)などの医学者たちがチベットに集まって、今でいうシンポジウムを開催してチベット医学の原型が作られたといわれている。従ってそれぞれの医学と共通した概念も数多く含まれているようであるが、その後チベット仏教の理念を中心として標高4000mという特異な環境などをふまえた独自の発展を遂げてきている。ただ残念なことにチベットはその後中国に合併されて(現在は中国の自治区)チベット医学も一時中断を余儀なくされた経緯がある。したがってチベット医学が再び見直されるようになったのは極最近になってからということになるので、これからその全貌が徐々に明らかにされていくものと考えられる。

チベット医学の原点は「四部医典」という歴大な資料に集約されているが、今その翻訳も漸くできあがりつつあるということなので、その完成が期待されているところである。チベット医学研究所のある西寧も私が訪れた時には街中が建設の真っ最中で、空港からの高速道路も工事中でしたので今頃は新しい、綺麗な街に生まれ変わっているのではないかと思うが、立派なチベット医学博物館もできたようですので是非また訪れて拝見したいものである。京都には「日本アルラチベット医学センター」が既に開設されていて、チベット医学の活動拠点となっているので今後は日本における医療活動も活発に

なっていくものと思われる。

その後「チベット医学の意義と今後の展開」と題してシンポジウムが開催されて熱心な討議がなされた。チベット医学にそれぞれの立場から関わった人達のそれぞれの思いが語られたが、中でも「西寧のチベット医は以前日本でもよく見かけた田舎の開業医と同じ匂いがする」という発言はまさにチベット医学の真髄を語っているように思われた。しかしそれを現代医学の中にどのようなかたちで取り込めるのかについては今後の大きな課題であるといってもいいかもしれない。医者が病気だけを診て患者を診ないと言われるようになって久しいが、多分今その部分を補って大きな役割を担っているのが看護師なのではないかという思いが先に述べた河北新報の「論壇」である。

チベット医学を現代医学としての科学的な視点からみてもまた薬湯など興味ある点が少ない。薬湯は症例により独自に処方された薬草から抽出された薬湯に時間毎に入るといふ、いわば個人毎に異なる湯治といったところであるが、私が西寧のチベット医学研究所にいった時に、丁度韓国から関節リュウマチの薬湯治療に来ていた御婦人がいて直接話を聞く事ができた。その人のご主人は泌尿器科医で、学会で日本にも一緒に来た事があるとのことでしたが、長年関節リュウマチに悩まされていてどんな治療も上手くいかなかったようである。偶々チベット医学の薬湯のことを聞いて西寧に飛んで来たとのことですが、何回かの薬湯で漸く長年の痛みがとれて本当に来て良かったと嬉しそうに話す笑顔がとても印象的でした。私は臨床検査にも暫らく関わっていたこともあってチベット医学独特の尿診にも大変興味がある。中世のヨーロッパで広く行われていたウロスコープというフラスコに入った尿を診て診断する方法もありますが、中にはかなり如何わしいものもあったようである。ただ尿の視診から得られる医療情報には可也のものがあることは確かなので、日常の診療にも行われるが、チベット医学の尿診は真っ白い磁器の皿に尿をとって、更に経時的な変化の観察を行うところに特徴があり、尿の性状を

観察するうえではいい条件ではないかと感心したところである。そこからどのような情報を得ているのかについては今後も検討したいと思っているが、いずれにしてもチベット医学の全貌解明についてはまさに途についたところといったところであり、これからの研究に期待するところである。

その翌日には「国際Healthy Aging シンポジウム—東洋の知恵と西洋科学の調和」が開催されました。基調講演は会長の渥美和彦氏（東大名誉教授）によりおこなわれ、伝統医学の現状と統合医療について話されたあと、アンドルー・ワイル氏（米、アリゾナ大学教授）、吉川敏一氏（日本、京都府立医科大学大学院教授）、全 世一氏（韓国、韓国国際CAM連合会議議長）、梁 乗中氏（香港、香港大学中医研究所）、艾 措千氏（チベット、青海チベット医科大学学長）、クリシュナU.K.氏（インド、アーユルベータ医学研究所）と世界各国で伝統医学を実践している第一人者による講演があり、それぞれの視点から興味ある話が展開された。講演のなかでも特に興味深く感じたのは吉川敏一氏の話でした。吉川敏一氏は「生体における過酸化と病態」というテーマで広く研究をしてこられた方で、私も過酸化脂質を研究していた関係で関連学会などではお世話になってきました。今回講演されたのは従来の耐糖能異常の早期発見、早期診断は何らかのかたちで既に病態が発生した段階でないと検出できないということがありましたが、漢方でいうところの「未病」、すなわちもっと早い段階での分子レベルの病態診断ができないかということで研究を推し進めてきた結果、新たに3つの因子を発見したという内容でした。今年度中にはそれらの測定をキット化して臨床応用に漕ぎ着けたいとのことでしたから、もしそれらが臨床に応用できることが明らかになれば予防医学上大きな貢献が期待されるものと思われる。また未病という概念も今後は科学的な根拠をもったものとして変化していくことが期待される。

伝統医学というどうしても非科学的という認識が先に立ってしましますが、逆に科学的な

観点から視てはじめて伝統医学の本質が見えるものと考えている。

Ⅲ. 今何故伝統医学なのか

明治維新以降はそれまでの漢方医学中心の医療から西洋医学に主流が移行して、現在のようない医療体制になってきましたが、多岐にわたる医療技術の開発によりこれまでに感染症を始めとして多くの疾患が克服されてきた。しかし一方において最近になって特に慢性疾患の多くが現代医学による治療に限界が見えてきたことも確かなことである。したがって新たな治療戦略の開発が望まれているところであるが、今その一つとして伝統医学の中に見出そうという流れがある。平成20年度からは40歳以上を対象としたメタボリックシンドロームの特定健診が始まりますが、生活習慣に対するこのような警告は貝原益軒の書いた「養生訓」や江戸時代の家庭医学書として知られている「病家須知」などには既に述べられていて、健康食としての日本食の重要性や食事量の「腹八分目」という言葉も今改めてまたその意味が理解されていることを思えば、このような伝統医学からはもっと多くの情報が得られるものと期待できる。

明治維新以来このような伝統医学が表舞台から消えてしまったことは確かであるが、日常生活のなかでは民間療法としてこれまで広く延々と伝承されてきているということはそれだけ人々に深く受け入れられてきたということの証でもある。そのことを科学という視点から改めて伝統医学の意味について見直すということなのだとして理解している。今各医科系大学にも伝統医学の講座が新しく出来つつあるが、そのことはまさにその証といえるものである。

「癒し」という言葉も一般に広く使われるようになった。その使われ方に関しては必ずしも統一されていないように思われるが、伝統医学でいうところの「癒し」の効果は多分個人が本来もっている「治る力」を最大限に引き出すことにあると考えており、そのような効果も多く期待されているところである。音楽療法や今話題の笑いの中に医学的な効果があるとすれば、そ

れはまさに「癒し」の効果なのではないかと思っている

このような伝統医学の見直しについて始まったのは実は日本よりも欧米のほうが早く、そのような欧米の動きを受け止めて日本でも見直しが始まったというのが実状である。勿論欧米では日本と医療事情が異なり、医療費が某大に嵩むのでサプリメントや鍼灸といったことで対応できるならばそれに越したことはないといった医療事情の背景もありますが、ただ違うなと思うのは伝統医学が本当に臨床的な有用があるのかどうかについて多額の研究費を費やして明らかにしようとしていることである。そして日本においても漸くそれが今動き出したということではないでしょうか。

参考資料

川村 武：伝統医学から学ぶこと－「信頼」が患者を癒す、河北新報「論壇」、平成14年10月23日発行

川村 武：看護は代替医療の担い手に、秘境に医療の源流を訪ねて－第一回日中蔵医学学術交流会記録集、現代企画；平成14年12月21日発行